SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

# はじめに



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2018-02-07<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 長谷川, 哲也, 塩田, 真吾<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | https://doi.org/10.14945/00024615 |

## はじめに

2017年3月に新学習指導要領が公示され，知識の理解の質を高め資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」がキーワードとして挙げられました。新学習指導要領では，「何ができるようになるか」を明確化し，全ての教科等を①知識及び技能，②思考力，判断力，表現力等，③学びに向かう力，人間性等の3つの柱で再整理しています。

こうした「主体的・対話的で深い学び」や「3つの柱での再整理」は，まさに本校が進めてきた研究とも一致しています。本校では，「主体性を高める授業過程」を研究主題に据えつつ，数年をかけて「主体性ある人間」の捉えを議論し，身に付けさせたい「知識・技能」「思考力・判断力・表現力・その他の能力」「関心・意欲・態度」という3つの要素を共有するに至りました。本年度は特に，教科で育てたい生徒像や教科の本質を踏まえて3つの要素を具体化し，各要素の特徴や関連性などを検討したうえで，それらを身に付けるための授業設計や，要素育成の判断基準の作成・試行に取り組みました。研究における成果や課題は教科によって異なるものの，育成すべき要素というマクロな視点から授業を構築することで，どの教科でも生徒一人一人の成長をより実感できる授業へと帰結したのではないでしょうか。また，全体研究で共有した枠組みは，まさにカリキュラム・マネジメントの発想そのものであり，PDCAサイクルによる授業改善にも繋がっていきます。本校の研究は，育てたい生徒像というゴールに向かう授業を追究することで，他の教科との関係性の中で自らの教科の意義をあらためて問い直し，内在する教科観や生徒観を省察するという，学校教育の担い手としての本質に迫るものでした。

一方，「国立教員養成大学・学部，大学院，附属学校の改革に関する有識者会議」が2017年8月に公表した報告書では，地域のモデル校としての役割が国立大学附属学校に期待されていることが強く示されました。その中で「多くの附属学校が研究成果を研究紀要等の形でまとめて教育委員会等に提供しているが，研究テーマ自体が汎用性に欠けるものや，記述が詳細である一方でポイントが端的にわかりやすくなっていないものなど，地域の公立学校にとって活用しにくいものが多い現状がある。結果として，附属学校の教員がかける膨大な労力と時間の割に，その研究成果が地域や全国で十分に生かされていない。」という厳しい指摘がありました。

本校では，有識者会議が指摘するこうした課題に真摯に向き合い，「連携と貢献」を重要なキーワードとして，様々な場面で活用していただける「お土産」（納得！使ってみたい！）となるような先進的で実用的な成果を蓄積してきました。特に，「研究協力委員」の先生方を中心とした地域公立中学校との連携，島田市教科等指導員の先生方との連携，静西教育事務所教育主幹・主査の先生方を中心とした教育行政との連携，さらには「共同研究者」を務める静岡大学教育学部の教員との連携などは，まさに地域のモデル校としての役割を果たすための先進的取組と言えるでしょう。

以上のような成果の集大成として本発表会をご覧いただき，参観者の皆様から幅広い視点でのご批評をいただければ幸いです。今後も一歩先を見据えた研究をさらに推進し，地域社会の「連携と貢献」をいっそう確かなものへと進化させるべく，本発表会が一つのステップになればと願っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

全体研究アドバイザー
静岡大学教育学部准教授　長谷川哲也
静岡大学教育学部准教授　塩田　真吾